別紙 4

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　連用形が名詞化可能な語彙的複合動詞に関する研究

氏　　名　瀋　豊丹

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、「VV 型」語彙的複合動詞を研究対象に取り上げ、その連用形が名詞に転成する状況を辞書とコーパスで調査し、さらに、他動性調和の原則、語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure）などの視点に基づき、その前後項動詞の構造、意味関係そして前後項の名詞化の状況を考察した。

全体は 7 章から構成される。

第一章は序章であり、研究の目的、考察の対象と論文の構成を紹介した。

第二章では、本論文の背景となる「動詞＋動詞」型の複合動詞に関する体系的研究や意味論的研究、また動詞連用形の名詞化についての先行研究を概観した。そして、動詞の名詞化、特に複合動詞の名詞化について動詞の視点から行った研究はあまり見られないことを指摘した。

第三章では、データベース『複合動詞レキシコン』から取り出した「VV 型」語彙的複合動詞を対象とし、辞書とコーパスを利用してそれらの連用形が名詞に転成する状況を調査し、辞書とコーパスのいずれでも単独で名詞化できる語を抽出した。

第四章では、主に第三章で抽出した名詞化できる「VV 型」語彙的複合動詞について、他動性調和の原則と語彙概念構造に基づく前後項動詞の構造と意味関係や前後項動詞の連用形が名詞に転成する状況の視点から分析し、名詞化できない「VV 型」語彙的複合動詞と対照することにより、それらの特徴や分布を考察した。

第五章では、生産性が高い後項動詞を持つ名詞化できる「VV 型」語彙的複合動詞の特徴の傾向を検討し、これらの後項動詞を持つ名詞化できない語の分布傾向と対照した。

第六章では、抽出した名詞化可能な語彙的複合動詞が転成してできた連用形名詞の分類について考察した。

第七章は結論であり、各章での議論を再確認し本論文の研究成果をまとめた。

本論文では、大規模で多様な語彙項目や例文を収録した辞書とコーパスを活用し、研究対象となる語の客観性を確保した。その上で、「VV 型」語彙的複合動詞の名詞化状況について体系的に調査し、これまで研究が少なかった動詞の視点から、連用形を名詞に転成できる「VV 型」語彙的複合動詞が持つ内在的な特徴を考察することにより、これらの複合動詞が名詞に転成する際の規則性と内在要因を探求する基礎を確立した。また、名詞化可能な語彙的複合動詞の特徴を明らかにすることは、日本語を第二言語として勉強する外国人学習者の支援にもつながると言える。